

終焉140年咸臨丸PR

■9月に「サミット」
■町民劇を上演予定



【木古内】幕末の軍艦「咸臨丸(かんりんまる)」が木古内町サライ岬の沖合で座礁、沈没してから今年で140年になる。同艦をまちづくり結びつけようと活動する「咸臨丸とサライ岬に夢みる会」(久保義則会長)は今年、全国の同艦ゆかりの地の関係者を招いて「咸臨丸サミット」の開催と町民劇上演の準備を進めている。昨年はサンフランシスコを目指し太平洋を横断してから150年。そして、今年の終焉(しゅうえん)140年とメモリアルイヤーが続く。同会では「木古内と咸臨丸をPRする絶好のチャンス」と意気込んでいる。(松宮一郎)

▲5月、サライ岬で5万球のチューリップが満開になる。花壇整備などはメンバーが1年中行っている

▲サライ岬にある咸臨丸の模型の前に集合する「夢みる会」のメンバー。中には中高生のボランティアの姿も

夢みる会、航海、続く

同艦は激動の幕末、明治期に活躍した軍艦。1857(安政4)年にオランダで完成。60(同7)年に日米修好通商条約を批准するため、幕府の使節団を乗せた米艦に随伴、勝海舟らが乗り込み太平洋を横断した。戊辰戦争中には新政府軍に接収され、維新後は輸送船となる。1871(明治4)年、北海道開拓に向かう仙台藩白石の片倉小十郎の家臣団を乗せ、木古内町サライ岬沖で座礁、沈没し最期を迎えた。

「咸臨丸サミット」は同会が主催する。町内を会場に9月下旬の開催に向け準備が進む。サンフランシスコに向けて出発した港、神奈川県横須賀市や水夫の故郷、塩飽諸島(瀬戸内海)、最後の乗組員の故郷、宮城県仙台市、移住先の札幌市白石区など、同艦にゆかりのある自治体の関係者にサミットへの参加を要請している。

咸臨丸子孫の会や研究者らとともに、シンポジウムやパネルディスカッションを行い、同艦をまちづくりにつなげる方策を話し合う。同会事務局長の多田賢厚さんは「咸臨丸をまちづくりにどう活用するか議論し、『共同声明』という形で成果を出したい」と話す。また、「咸臨丸が沈んだ原因などはいまだに解明されておらず、勉強会や講演会などを定期的に開き、新しい事実の掘り起こしを進めたい。これからは咸臨丸の歴史的な意義を伝える活動にも力を入れていく」と張り切る。

サミット2日目は町民劇を上演する予定だ。タイトルは「永遠(とこしえ)に、咸臨丸」。脚本は、同会顧問で「咸臨丸 栄光と悲劇の5000日」などの著書がある札幌在住の作家、合田一道さんが手掛けた。物語には勝海舟や福沢諭吉、榎本武揚らが登場し、太平洋を横断した37日間の航海や大政奉還、箱館戦争、輸送船として迎えた最期を描いている。

初演は映像と音楽を組み合わせた演出で、町民による朗読劇という形になる。「朗読劇からスタートし、少しずつスケールを大きくしていき、最終的にはサライ岬で野外劇を上演するのが目標(同会)」。国道228号沿いにあるサライ岬の公園の整備は、ボランティアの町民の熱意に支えられてきた。これまでに同艦の模型設置やチューリップの球根植え、花壇整備をしてきた。そのかいあって、5月初旬に行われるチューリップ祭りには多くの観光客が来場するようになり、サライ岬の景観と活動の知名度もアップした。

同会は2004年の活動開始以来、会員数が500人を超す組織となった。最近では中高生らもボランティアとして加わるなど、多くの町民に町活性化に向けた取り組みの意識が浸透してきている。久保会長は「会員の努力は春にチューリップが満開になることで実を結ぶ。若い人のパワーも活動の励みになる」と喜んでいる。サミット開催、町民劇を上演する2011年は、同会の新たな船出の年になりそうだ。